

人生計画書

1994年3月17日 北見昌朗
1650
姫路市、書取山にて

職業生活も恵まれていました。大学卒業後、中部経済新聞社に入社しました。そこで与えられた名刺は「新聞記者」というもので、北見昌朗はこの片書きのおかげで何も中味の無い若造なのに素晴らしい人物に出会うことができました。仕事は面白く、あ、という間の1年間でした。

だが、新聞記者という仕事に満足しつつも、中部経済新聞社という会社には不満がたっていました。経営者や上司のことを、口を開けば叱責し、自らの権利ばかりを主張しました。「新聞記者」という名刺を下したことに對する感謝の気持ちがありませんでした。

以上、私の上半期の人生は、人から何かをもらうことはあっても、人に何かをあげるこ

発表にあたり、この私の心境

私、北見昌朗は父、北見保郎、母恵美子の二男として、昭和34年1月31日に生まれました。現在35歳です。

人生の時刻によれば、35歳は1200で、半分が終わりました。これを機に、人生の上半期の決算をします。

北見昌朗の上半期は恵まれたものでした。父と母は4人の子供をし、かり育ててくれ、何不自由のない生活でした。私は大学まで進学でき、親の援助で家まで建てました。現在、北見昌朗がこうしていられるのも、元はすべて父と母のおかげです。

しかし、北見昌朗は、親が子供を育てるのは当然だと感謝の気持ちがありませんでした。

この無いもので、債務超過の状態でした。DMPに参加した理由は、自分の人生に對する焦りからでした。若いと思えば、もう35歳で、残りは半分しかない。ふ、とすると、おぐ死ぬかもしれない。いったいオレの人生は向きのたつら、結局、オレなんていなくても何も困まらない存在ではないか、気が落ち込むばかりでした。

DMPに参加して、1つの質問が出ました。「自分が毎日(職場で)命がけでつりつづけているものの名前を書け」というのです。北見昌朗は「お客様」とか「幸福」とか「人格」とか「生きる意義」とか書きましたが、みなタ×で、12個目にして「北見昌朗」という答えに行き着きました。

私はこれから毎日、命をかけて北見昌朗をつくり続けたいかなければいけない。それは生んで育ててくれた父母に対する責任である。それから中部経済新聞社にも感謝しなければいけない。

人間は必要とされているから、今、生きていくんだ。自らに与えられた使命を自覚せねばならない。

人間、死ぬことは逃れることはできない。だから、今、この瞬間に命を燃やさないといけない。

北見昌朗は、人生の下半期にあり、
〔人様から感謝される人間〕にたらないといけない。これまでの借りを返さないとけない、せめて借金だけでも返した。

4

経営者として

新聞記者は北見昌朗の天職である。だが12年間、新聞記者をして、ほかには仕事ができなかった。

「中小企業の人事管理研究所」の設立である。中小企業の多くは、人の問題で困っている。その原因は、人事に関する原理原則を実践していないことだ。

これからの中小企業は、本当の能力主義を実現しなければいけない。社員の働きをきちんと評価し、賃金に結び付け、昇進昇格に結び付けることが必要だ。

「中小企業の人事管理研究所」は、社員99人以下の小企業を対象とし、

5

助言にとどまらず、具体的な助力を行う。業務内容は次の通り。

1. 社会保険労務士事務所
2. 賃金コンサルティング
3. 採用コンサルティング（求人広告も手がける）
4. 社員教育（DMPとタイアップ）
5. 経営指針書作成のお手伝い
6. 女性、高齢者、障害者雇用の促進

以上

中小企業の人事管理研究所は、今の世の中で能力を発揮できずにいる人間（女性、障害者、高齢者）を採用し、その労働の場、自己実現の場にする。

6

中小企業の人事管理研究所は、人事のコンサルティング会社として、全国で指折り、名古屋が一番になる。（量、質ともに）

北見昌朗は、中小企業の人事管理研究所を1994年、3月17日、姫路市の書写山において創立した。1995年元旦から業務開始する。

北見昌朗は1994年中に物心両面の応援者を5人つくる。1994年中に毎月200枚以上お名刺を交換させていた。1995年元旦に300人の経営者から名刺状をいただく。

7